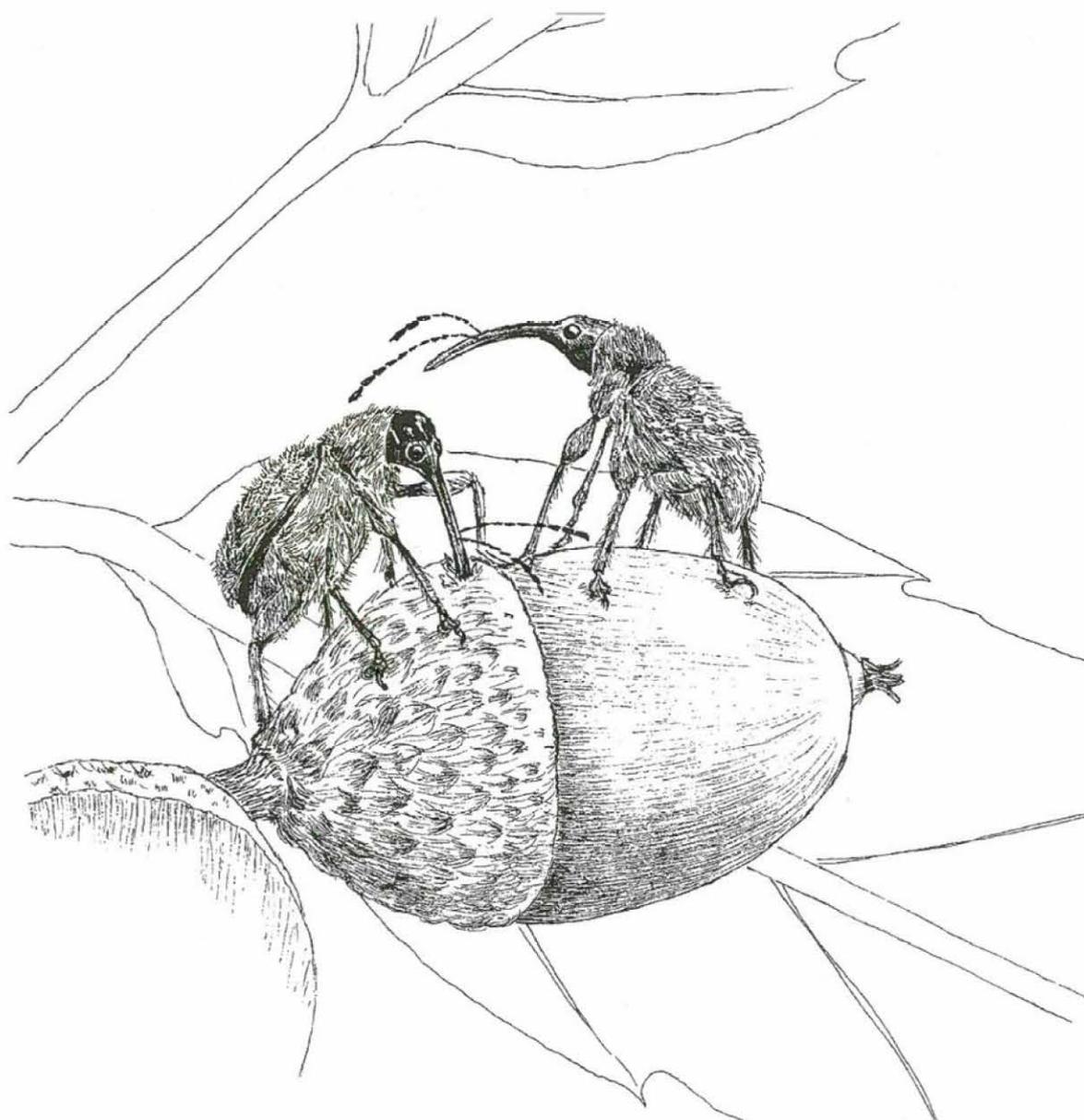


群馬の自然

特集 ぐんま百名山の自然X
下仁田町の山①

No.165
2012 夏

特定非営利活動法人(NPO)
群馬県自然保護連盟
URL <http://www5.wind.ne.jp/shizen/>
e-mail shizen@dan.wind.ne.jp



ハイイロチョッキリ

丁須ノ頭(妙義山)

本川 三郎

妙義山と言えば相馬岳、白雲山などを代表する表妙義と御岳、赤岳、丁須ノ頭、烏帽子岳、等のある裏妙義に分かれる。何れも上毛三山の中でも、奇岩、奇峰を連ねた起伏に富み私の好きな山です。

私が群馬に来て初めて登ったのが、丁須ノ頭(1057m)で、今から40年ほど前、当時勤めていた会社の上司であり、野鳥の会群馬支部の理事をされていた、飯野俊雄さんに連れられて行った山で、それから病みつきになつて幾度か登つた思い出の山です。

当時から見るとコース、案内板等も整備され、訪れる登山者も多いようですネ。

横川駅から中木沢に沿つて妙義湖へと向かい、登山道は国民宿舎の左脇にあり、籠沢コモリザウ沿いの道で、少し入った左奥には、かつて話題になつた連合赤軍の隠れていた岩穴があります。

30分ほど進むと籠沢分岐に着く。ここからの眺めは、右手前に木戸と呼ばれる大きな岩壁が見られ、左には風穴尾根の荒々しい岩場

ぐんま百名山の自然X 下仁田町の山①

目次

表紙	ハイイロチョッキリ	水村 聡子	1
特集	ぐんま百名山の自然X		
	下仁田町の山①		
丁須ノ頭(妙義山)	本川 三郎	2	3
妙義山塊	浅川千佳夫	3	4
御堂山	須田 けい	4	
行事報告			
六万騎山自然観察教室(4月15日実施)	谷畑 晶子	5	6
六万騎山の記録	里見 哲夫	6	8
相馬山・黒岩清掃登山(6月3日実施)	南 一也	8	9
赤城長七郎自然観察会(6月10日実施)	須藤 光代	9	
植物歳時記(58)アケボノソウ	吉田 龍司	10	11
図鑑の内と外 植物私記 ③4 アベマキ	佐鳥 英雄	11	15
群馬の地質 野山の放射能	飯島 静男	15	
残された自然の中で(157) 栃尾のツバメ	谷畑 藤男	16	
植物をミクロで見る(6) アゼスゲ	青木 雅夫	17	
吾妻川に出没したイノシシ	関 敏雄	17	
カイツブリの子育て観察	三井 田進	18	20
平成24年度総会報告		20	
平成23年度会計報告		21	
平成24年度予算案		22	
事務局日誌(165)		23	
事務局だより		24	



が望めます。

しばらくスギ林の中を登り、さらに雑木林の中を進むと、兩岸に絶壁がそそり立つ木戸前です。

ここから岩場で木戸の谷間に入る。少し行くと左から烏帽子沢が流下している、ルートは右の籠沢へと進むが、(ここは何本かの左への道があるが、右へ右へと進む)さらに沢を

つめるとルンゼ状(岩壁に食い込むような急な岩溝)になり、上部からクサリが現れる。これが最初のクサリでそれを登ると沢沿いの岩の多い道が続ぎ、さらに2ヶ所のクサリを登りつめると裏妙義の稜線に出る。

道標に従って10分程でキノコ形をした(写真)丁須ノ頭に到着です。

丁須ノ頭からの展望は素晴らしく、西は浅間山をはじめ上越の山々が、東には赤城山、榛名山をはじめ関東平野が望まれます。

下りは鍵沢を下るのが無難で、横川の坂本寄りの旧18号にでます。

妙義山塊

浅川 千佳夫

職場の机に座って、横を向いて遠くを望むと浅間山が見えます。そのすぐ左隣に低い岩山が見えます。妙義山です。

「群馬の自然」を見ていくと、妙義山について書かれた文章がいくつかあります。No.6(1972秋P7〜8)、No.70(1988秋P5)、No.85(1992夏 P3〜7)で、これらを読めば妙義山についておおよそのことを知る

ことができます。そこで以下に私の思い出話を少し紹介します。

かつて他県の知人を伴い妙義山に行った時、その知人いわく「聞きしにまさる奇岩の山だ」。標高1,000m前後ではありませんが、その山容はきわめて異様であり、岸壁のつらなりは、そのおいたちに由来するようです(「群馬のおいたちをたずねて(下)」「上毛新聞社」)。岩面は石が混じった堆積層のようで、もろそうに見えます。また谷が深く急です。ヤマビルが多く山歩きを終えて道路に出るころには靴下を脱ぐと、たかられていることがよくありました。マムシにも多く出くわしたことがあり、一度は杉林の中でマムシを見つけ、一緒に歩いていた仲間と二人で生け捕りにしたこともあります。太くて一升瓶に入れるのに苦労したことが思い出されます。

1974年から2年間を、裏妙義で鳥類調査に費やしたことがあります。月に1回の頻度で朝8時前から午後4時頃まで、一定コースを歩いて出会った野鳥を記録していきました。その結果13目31科80種の鳥類を記録しました。アカシヨウビン、イワヒバリ、カヤクグリ、ハギマシコ、500羽位の群れのオシドリなどは、今も記憶に残っています。野鳥以外

ではニホンザルの群れによく会いました。早朝に林道上で囲まれてしまったこともあります。妙義山周辺にはニホンザルの群れがいくつか生息していて、近年人家に近づきすぎ、わるさをしているようで悲しく思っています。

ある冬のこと、中木沢沿いに歩いているとヤマメを見つけました。まだ小さかった子供を連れていて、二人して沢に入り30分くらい追いかけて回し、ようやくそのヤマメを捕まえることができました。20cmくらいの大きさでした。その帰りの車の中で、子供が急におなかがいいたいと言いました。これはヤマメのたたりだということにして、以後は寒い季節に魚を捕らえることをやめることにしたのです（本当は冷たい水に長く入っていたのが原因だったのでしょう）。

また夏には林道を歩いていると、ハンミョウがスツ、スツと前を歩いては止まり、また歩いては止まりして、楽しませてもらえましたが。夏の林道は風が通らず暑い思いをしましたが、深い谷に入ると人の入り込まないところもあり、意外に水の溜まっている深みのある沢に裸で入り涼んだりもしました。もう30年以上昔のことで、妙義山塊は私にとって青春のひと時を織り成した山です。

御堂山

須田 けい

不思議な形をした山が立ち並ぶ、こんな山があることを初めて知ったのは、10年前の12月の事でした。山ともだちに誘われて、どこを走っているのかも解らないまま、登山口に着いたのでした。

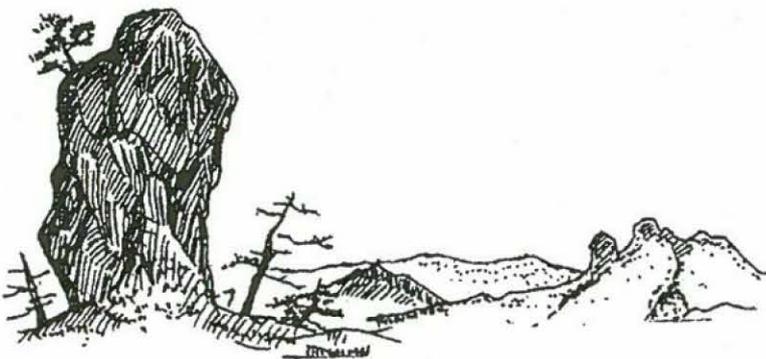
登山道は雪が積もっていて、時々踏み抜くと捻挫をしないかと思うほどの隙間で、大きな石がゴロゴロしていました。歩く道の左側に、特に大きく自立つふたつの岩があつて、「じ・ばば」と呼ぶと教えて貰いました。聞いた事もない名前だ、と思いました。

堂岩山の頂上は、標高878.3m。着いたときには「えっ、これが頂上……？」という感じでした。何しろ立ち止れば寒い、雪は降ってくる、という状態で、木の間越しに見える妙義などの山も、魅力的に見えなくて、口にくそ出さなかつたけれど、早く帰りたいと思うばかりでした。

あまり寒いので、お昼はほかで食べよう、という事になって下り始めましたが、「じじ・

ばば」は気になります。登る道はないかと、岩の下を探して見ましたが、登れる様子は全くありませんでした。結局お弁当は、鍛柄山で食べる事になりました。

御堂山に行こうという話を聞いた事がありません。遠くから見ても面白い姿、一度しか行つた事のない、これからも行かないであろう山ですが、生涯忘れる事の出来ない山になりました。



行事報告

4月15日実施

春の自然観察教室

六万騎山自然観察会に参加して

谷畑 晶子

NHK大河ドラマ「天地人」の舞台となり、またカタクリの大群生地で上越国境の山々の展望も素晴らしく、誰もが息をのむほどの場所と言われる坂戸山、この自然観察会をとて楽しみにしていた。四月十五日、六時半に上信バス車庫を出発。車中から桜の花や春爛漫の景色を楽しんでいると、事務局長さんより「雪のため坂戸山登山は無理かもしれませんが、その場合は同じくカタクリの群生地である六万騎山に変更します。」との話があり、雪の状況が心配になったが、スプリングエフェメラルに出会えるならどこでも、と思つてこれからの山旅に色々思いを巡らせていた。関越トンネル手前あたりから霧がたちこめ、トンネルを抜けると白銀の世界へと一変する。やがてバスは六日町インターから国道253号、17号を経て六日町にある坂戸山登山口駐車場に到着。民家と民家の間に3mもの積雪があつ

てビツクリ。でも駐車場の端にはツクシがたくさん顔をだして春の訪れを告げていた。「行けるところまで行きましょう。」ということになり、身支度を整えて出発。空にはツバメが飛び交い、通りすがりの池ではマガモが11羽、優雅に泳いでいた。まもなく遠くシベリアの地へ飛び立っていくのだろうか。木々の芽吹きはまだ早く、なだらかな雪道を一步一步踏みしめながら登つて行くと、残雪の中にキンポウゲ科の可憐な白い花、キクザキイチゲが咲いていた。里見先生より桜について教えて頂く。種類が約300種もあること、種類の特徴が良く表れる萼筒は、筒形、釣鐘形、



壺形、筒状のつり鐘形の四つがあること、また日本に自生している主なものはオオヤマザクラ、オオシマザクラ（桜もちを包むのに使われている）、ヤマザクラ、タカネザクラ、エゾヒガン：などで、観音山の桜についても話があった。コルクの原料となるアベマキはクヌギと同じドングリの仲間であり、二つの葉の特徴や分布についても教えていただいた。また細長い形の蜂の巣はフタモンアシナガバチの巣だそうで、初めて見た奇妙な形の巣に、蜂は何を思つてこの形に作るのか聞いてみたいと思つた。積雪が多いため坂戸山登山を途中で断念して駐車場に戻り、バスで南魚沼町にある六万騎山へと向かう。六万騎山登山口にも積雪があつた。地藏尊より階段状のなだらかな道をゆつくり登つていくと、まだ蕾のカタクリやミスミソウ、キクザキイチゲ、コシノコバイモなどの花々が目を楽しませてくれた。花を採配に見立てたというサイハイランや、表裏も同じリョウメンシダ、シシガシラ等のシダ類、また雌株、雄株があり雌株は赤い実をつけるといふアオキなど次から次へと教えて頂き、どこまで覚えられるのかな、と思いつつも覚えたい一心で夢中でメモをとつた。雪の中にフキノトウを友達が見つ

て感激。山頂は平地で、ぼんやりと魚沼スカイラインや残雪の八海山等、新潟の山々を展望することが出来た。また木々の根本の雪が溶けて凹んでいる、という不思議な現象を見た。これは木が呼吸し、熱を出して雪を溶かしているのだという。木も生きているのだと実感させられた。冬眠から覚めた蛙にも出会い、春の訪れをあちこちで感じる事が出来た。また驚いたことに山頂で結婚式があり、祝杯の席が設けられていて幸せムード一杯。観察会参加者もお神酒を授けて頂いたとか。六万騎山は城郭地で、きつと縁起の良い山なのだな、と思った。山頂付近は雪も少なくなっていてカタクリの開花数も増し、びっしりと地表を埋め尽くした群落は見事である。カタクリは種子が発芽してから花が咲くまで7〜8年かかるという。葉も開花まではずっと一枚で、二枚になって初めて咲くのだそうだ。花びらのW、Mの濃紅色の模様は蜜があるという道しるべになっているとか。ジュルジュルとエナガの鳴き声が聞こえ、木々の間からヤマガラも顔をのぞかせる。下りながら、カタクリやイワウチワ、ヤマツツジ、ノダフジ、タチツボスミレ、またベニシダ、クラマゴケなどのシダ類、コナラやミズナラやハイイヌ

ツゲ、クロモジ、エゾユズリハ、マンサク、チシマザサ：などたくさん植物に出会い、名前や特徴を覚えて頂いて頭の中が植物図鑑のようになつてしまった(その時だけ)。下山後、バスでさくり温泉健康館に寄つて入浴。昼食をとり疲れを癒して帰路についた。六万騎山321m、自然の奥深さ、神秘さに触れ、また素敵な方達にも出会い、充実した一時を過ごさせて頂いた。役員の皆様、観察会実施にあたり大変なご苦労があったことと思ひ、深く感謝しております。皆様ありがとうございました。

六万騎山の記録

里見 哲夫

平成24年4月15日(日)の坂戸山観察教室は、全員が定刻に集合し予定通り出発することができ幸先はよかつた。車中で早速、吉田事務局長から実施計画について報告と金井理事長からの挨拶を頂いた。出発はしたものの、頭の中が真っ白になるような報告を受けた。今年は例年になく厳しい寒さの冬、参加者も予定通りの実施が出来るかどうか多少の不安は

持ち合わせていたことと思うが、現地からの情報は極めて厳しいことであつた。最悪の場合は雪の山を見て帰ることになるかも知れないとの話まで出た。金井理事長の挨拶も寂しさと不安を兼ねたものだった。他に、事務局では本日まで希望者が多く、その調整に大変なご苦労のあつたことなどが報告されたが、結局参加者は25名であつた。

バスは順調に走り、坂戸山登山口の坂戸城跡近くの駐車場に到着した。地元の人を交えて相談したが登山は無理との結論に達したが、それでも数分先にある坂戸城跡まで行つて見ることにした。城跡にある社の鳥居はまだ半分近く雪の中。全員がこれより先は登ることが不可能である事を納得する。幸い、大きなスギの下は雪がなく、ここで30〜40分の観察をする。キクザキイチゲの蕾がいくつか見られた。他にはミツバアケビ、まだ芽が出ないオオバクロモジ位。誰かが見つけたハチの巣、昆虫に詳しい服部さんからフタモンアシナガバチの巣との説明を聞く。吉田事務局長から雪上に落ちていたケヤキの小枝について、これはケヤキが種子を飛ばす時の知恵である事を聞く。私からは昨日の高崎での観察会でアベマキとサクラについての話をさせて頂

いた。カマキリの卵塊も見つかったが不明と
のことで、帰宅してから調べてみたところオ
オカマキリの卵塊であることが分かった。そ
の後、近くにカタクリの群生地があるとのこ
とでそこへバスで移動する。ここは歴史的に
知られている六萬騎山で標高は321mの山だっ
た。登山口脇の家はまだ雪に囲まれている。
登山道は雪で覆われていたが見上げると、陽
光を受けた山肌には雪の消えた箇所が結構目
に入る。一同喜びの声を挙げ登山する事に決
定した。

道路に面した斜面にはシャガが群生してい
る。雪を踏みしめつつ登ると、すぐ吉田事務
局長がコシノコバイモの花を見つけ説明を聞
く。この植物は今日の観察会の目玉になった
稀少な植物。それぞれがカメラに納める。カ
タクリも結構出ている。サイハイランが足元
近くに4株、こんな近くで見られるのは今時
珍しい。サイハイランの語源についても触れ
た。今回の目的の植物カタクリ、キクザキイ
チゲ、ミスミソウ（ユキワリソウ）群落も見
られて大満足。雪の消えたすぐ近くにはフキ
ノトウが4〜5個ほど目に留まるが、雪の中
から出て来たばかりの薄黄色した芽である。
雪のない地方との違いも垣間見ることが出来

た。陽光を一杯に受けているフキノトウの方
が香りが強いようである。登山口から下山ま
での間に見られた主な植物としては、高木で
はスギ、アカマツ、クリ、コナラ、クマシデ（花）、
ブナ、オオヤマザクラ、カスミザクラ、ホオ
ノキ、リョウブ等。低木ではイチイ、ハイイ
ヌガヤ、ハイイヌツゲ、ミヤマイボタ、ケア
ブラチャン（蕾）、ダンコウバイ（蕾）、オオ
バクロモジ、ヤマツツジ、ヤブツバキ、マル
バマンサク（花）、アオキ、ヒメアオキ、エゾ
ユズリハ、ヤブコウジ。草本ではタチツボス
ミレ、山頂近くでナガハシスミレ（花）を見た。
このスミレの特徴は花の距が10〜15mmあって、
紫紅色〜淡紅色の小さな花、日本海要素の植
物である。カタクリ、キクザキイチゲ、ミス
ミソウ、ベニバナイチヤクソウ、オオハナウ
ド（芽生え）、イブキトラノオ、オオウチワ、ショ
ウジョウバカマ、ホソバカンスゲ、コシノホ
ンモンジスゲ。シダ類ではクラマゴケ（山頂）、
オオハナワラビ、クジャクシダ、リョウメン
シダ、ナライシダ、オオクマワラビ、ヤマイ
タチシダ、ベニシダ、ジュウモンジシダ、ワ
ラビ、トラノオシダ、シシガシラ等。幸い天
気もよく、山頂からの眺めもよく、樹木の間
から見る遠山の雪景色は素晴らしかった。同

時に、今日の目的がほぼ達せられたことを喜
び合う事も出来、事務局関係者もさぞホッと
したことと思っている。ここに、以下今回の
自然観察教室で知り得た主な事象について、
記して見たが如何なものだろうか。

① ササについてミヤコザサ線についてと、
この地のササをチマキザサと申しあげたが、
後で現地のササを見たところ軟毛があり、疑
問を持ちながら帰宅し、調べたところクマイ
ザサであることが分かった。ここに誤りであつ
たことをお詫びするところである。

チマキザサ節は下記のように区別するので
今後の参考にして頂きたい。

・葉の下面（裏）が無毛のもの↓チマキザサ
・葉の下面（裏）に軟毛がある↓クマイザサ
「お土産」はサービスエリアで購入する。当地
方の名産「笹だんご」は飛ぶように売れ、家
内も人並みに買って来た。書物には「笹だんご」
にはチマキザサを使うと記してあるので調べ
て見た。食べた後、本当にチマキザサを使っ
ているのだろうか、ささやかな疑問が生じ
た。早速、ルーペを持ってきて調べて見たと
ころ毛が多いことに気づく。何とクマイザサ
が使われている。チマキザサとクマイザサと
は毛の有無で区別する為、両種を区別して使

うことは困難なことであり、どちらを使っても、そうめくじらをたてて問題にする程のことではないだろう。今後も調べて見たいと思っている。馬鹿げた事だろうか。

また「だんご」はササの表面に包みこんで、イグサで括っている。

② ノダフジとヤマフジについて吉田事務局長から両種の説明があった。登山口近くの所には太さ直径25cm位のノダフジがあった。絡まれていた木は枯れていた。誰かがあれほど愛されたら…との会話が耳に入ってきた。何事もほどほどであることがいいのだろうかと感じとった。如何なものだろうか。それはさておいて、両種の区別は左記のようである。

比較点…ノダフジ

ヤマフジ

茎 …右巻き

左巻き

花穂 …長く20〜50cm

短く10〜15cm

花色 …紫色、稀に白色

白色または紫色

葉 …殆ど無毛

表裏に毛。裏面

には絨毛が密生

莢 …細い毛がある 短毛が密生する

③ この山で見られたサクラは、樹皮などからオオヤマザクラとカスミザクラの2種が確認できた。オオヤマザクラは日本海要素の種で、北国の遅い春を彩るサクラで花（淡紅

色（紅色）と同時に開く若葉は赤みが強い。樹皮は茶筒や茶托などの材料として珍重されている。

④ 野鳥について、坂戸城跡への手前で、カモの雄と雌が泳いでいるのを間近で観察することができた。他、アオジ、カワラヒワ、シジュウカラ等がいたようである。

⑤ 山頂からの帰途、雪の上でタヌキの糞を観察する。何の糞か互いに疑問を持ちながらもタヌキの糞であろうと結論づけた。糞の中にコナラの実がそのままの状態で見つかった。このことを関敏雄さんに話したところ、タヌキの糞に相違ないとのことだった。タヌキは雑食性なのでいろんなものが見られるようである。高崎観音山での谷畑先生の調査ではイチヨウやヤブランの実が砕かれずそのままの姿で見られたという。タヌキはカモシカと同様、一箇所に糞をまとめてする習性がある。これを一般に溜糞と呼んでいる。

六万騎山頂では、運よく地元の人々の結婚式に出会う。テープで祝詞が流れ、お酒を頂いた運のいい人もいたようだった。全員が揃って萌気園・さくり温泉健康館に到着したのは12時少し前だった。ここで入浴、昼食をとる。目的を達し、余裕を持って帰路に着く。

解散前の事務局長、理事長の挨拶は朝とは違つて、ほぼ満足に満ちた明るい言葉を頂いた。解散となったのは3時30分頃である。ここに事務局諸氏のご苦勞に感謝し、自然観察教室の記録とする。

6月3日実施

相馬山・黒岩

自然観察会と清掃登山

南一也

登山を始めて一ヶ月半。水沢山以外は経験がなく、初めての相馬山と初めての清掃登山を楽しみにしておりました。

当日、生憎の天候にも関わらず多数の方々お待ち合わせ場所に集まっておりました。

ゴミ袋とトングを渡され定刻通り出発。

途中、植物の観察や付近一帯の昔話はとても楽しく拝聴いたしました。

大きなお地蔵様のあたりで霧が濃くなり雨脚も強くなつてしまひ、相馬山登頂を変更して「ゆうすげの道」方面へ下山ルート。

今まで気にとめなかつた草花や樹木の名称やこれから咲く花の名称等々。とても覚え切れないほどでした。

「昭和天皇散策の道」から出発したヤセオネ

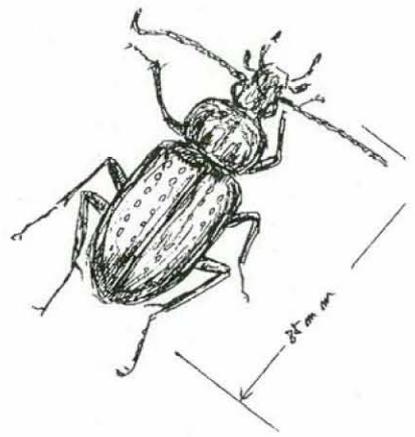
峠停留場を目指しながらもう一つの目的のこみ拾い。道路端にスマシレが沢山咲き誇る間に空き缶、タバコの吸い殻、自動車の部品。

歩いてみると花の美しさとゴミを捨てる人の心無さが複雑な思いにさせました。

天候都合で予定よりも早く解散となりましたが、地元に住ながらいまままで気がつかなかった自然に触れた一日でした。

今回の登山に参加させて頂いて、自然の美しさや力強さ、そして自然を守る大切さを学びました。

引率してくださった先生やスタッフの皆さん、参加者の皆様お疲れ様でした。またどこかの山で逢える日を楽しみにしております。



6月10日実施

赤城長七郎山からおとぎの森

自然観察会に参加して

須藤 光代

6月10日、前日の梅雨入りの発表があり、雨を覚悟して、集合場所の小沼駐車場へ向けて、草津から6時に出発しました。

日曜日で、野鳥の会の観察会も重なり、駐車場は、既に相当の車で混んでいました。指導員の方々の挨拶、準備体操を済ませ、時計回りに小沼から長七郎山へと出発しました。

トウゴクミツバツツジは、もう終わりかと思っていたのですが、小沼辺りは、気温が低いのか、まだツボミもあり、美しい色を十分に楽しむことができたのは、予想外で嬉しかったです。ヤマツツジの朱色、シロヤシオの白とのコントラストも素晴らしかったです。

あいにく、長七郎山の山頂は、ガスが出て眺望は残念でしたが、晴れていれば、スカイツリーも見られるとのこと、冬の澄んだ空気の中、スノーシューで来てみたいと思いました。登山道には、かわいらしいスマシレがたくさん咲いていて、アカフタチツボスマシレとサクラスミレ、フモトスマシレを今回は、覚えるこ

とができました。

おとぎの森での昼食時、ミズナラの新緑に囲まれながら、やはり自然の中はいいなど、改めて思いました。

今回は、一緒に参加した仲間の一人が、浮石で転んで歩けなくなり、指導員の方々が、他の参加者にも、ご迷惑をお掛けして、心苦しく思っています。その事故の後、皆さん足元に神経を集中して、下を向いて歩きました。日々のトレーニングが大切だということも納得しました。

また、いろいろなイベントに参加したいと思しますので、よろしく願います。今回は、ほんとうにお世話になり、ありがとうございました。



植物歳時記 (58)

アケボノソウ (曙草)

吉田 龍司

あけぼの草ひらきて蟻の道となる 龍司

植物好きは若い頃からで、植物図鑑片手に山歩きを重ねていた。「アケボノソウ」は当時の登山の本には、高山植物として掲載されていたが、高山で見かけたことはなかった。名前前から受ける感じが優しいイメージのためか、よく山岳雑誌で目にしたが、人気の植物だったと記憶している。

図鑑によるとアケボノソウは、リンドウ科センブリ属2年草の植物とあり、学名は「スウェルティア・ピマクラタ」という。属名スウェルティアは「センブリ」、種小名ピマクラタは「2斑のある」の意で、シーボルトへの献上名がついている。

分布は北海道から本州、九州、中国、ヒマラヤと記され、生育地は湿原の周辺草地や、山間の小川の畔など湿った場所を好むとあり、私が若い頃山岳雑誌で見た「高山が生育地」とは違っていた。アケボノソウと私の出会いは、



アケボノソウ

日光戦場ヶ原、尾瀬、赤城山等の湿地であった。アケボノソウは清楚な花姿が好まれるが、実は花には、生き抜く戦略ともいえる驚くべき不思議な仕組みが隠されている。花はセンブリに似た白色で径2cm。花冠は殆んど基部まで深く裂けて、夫々の5つの花弁(裂片)には多くの黒点が散在し、花弁の中央横に2個並んだ淡緑色の丸い斑紋がある。これがアケボノソウの最大の武器ともいえる特徴である。通常花は雌蕊のもと付近に蜜溜り

があり、そこに昆虫を誘い受粉させる。しかしアケボノソウにはこの法則は当てはまらない。蜜は花弁に2つ並んだ淡緑色の斑紋から分泌する。このような位置に蜜腺溝がある植物は珍しい。この花の媒介者は蠅や蜂で、蜜腺の分泌するすぐ近くには雄蕊があり、吸蜜のため蠅や蜂が花弁を這い回ると、花粉に触れる仕組みである。2岐になった雌蕊の柱頭は短く、外側にやや湾曲していて蠅や蜂などの接近を待っている。観察していると、蟻も吸蜜のためか、よく花に登っているのを見かける。

高さ60〜90cmの茎は、四角形で枝が多く、5〜12cmの葉は、無毛で対生し3葉脈が縦にあつてよく目立つ。

アケボノソウの1年目はオオバコに似た根生葉だけのロゼットで生育する。しかしこの時期のオオバコは既に枯れていてアケボノソウと見間違えることはない。2年目になると地上茎を伸ばして花を咲かせる。花期は9〜10月。透感のある美しい秋の花である。

アケボノソウの名の謂れは、どうも花の斑紋にあるようだ。5枚の細かい点々を明けの星に見立て、淡緑色の丸い模様を月に例えた説だという。しかし並んだ斑紋を月に例える

のは月が2個あることになり、この説はいただけない。こじ付けとは思われるが面白い。

「あけぼの」の語源は『語源由来辞典』によると「夜明け。夜が仄々と明け始める頃」とある。「明け」と「ほの(ぼの)」の語源構成で「仄々明け」とも言うようである。「ほの」は「ほのぼの」「ほのか」などと同源で、夜が明け始め、東の空がほのかに明るんでくる状態が「あけぼの」である。古くは「暁の終わり頃」や、「朝ぼらけ」の少し前の時間をいった。

漢字の「曙」は日編に署である。この「署」には原義の「文書を集めておく役所」という意味はなく、「曙」は「日光が明るくなることを表す」会意文字(意味を合わせて作られた漢字)である。

この曙とよく似た言葉に「暁」がある。こちらの語源は「明か」と「とき」で「夜が明けるとき」という意味である。どちらも夜明けを表現する言葉であるが、どちらが明るいかという点、「曙」である。「暁」は時刻で言うと午前3時から5時位で、厳密に言えば夜明けの少し前のことを言った。この暁の終わりの頃が曙であり、暁より大分明るい。つまり夜は、宵↓夜中↓夜半↓暁↓曙の順で明けて行く。

また、曙の同義語も幾つかあり、「東雲」や「明け方」などがあるが、あえてこの語源には触れない。

アケボノソウの方言等は『日本植物方言集成』を繙いても記載がない。言ってみればメジャーな花ではないのか、花言葉や誕生花にも登場しない植物なのは、美しく可憐な花だけに残念な気もする。

珍しい花は何所でも盗掘で失われてきた。しかしこの頃は動物の被害も無視出来なくなってきた。アケボノソウは鹿の被害に遭わなかったことから、不嗜好植物とされていた。しかし近年六甲山のアケボノソウが、ニホンジカの被害を受けたことが分かり、動物による食害植物として、認識を新たにしなければならなくなった。だが、赤城山のアケボノソウは動物の食害ではなく、心無いハイカーによって持ち去られ、現在絶滅に瀕している。これまでも多くの貴重な植物が持ち去られて、赤城山で見られなくなったことは悲しい。いつまでも郷土のシンボル赤城山で、それらの花たちを愛でたいものと願う今日この頃である。



図鑑の内と外

植物私記 ③④

佐鳥 英雄

たとえばこういう一文があります。

「二匹のミツバチがその生涯のうちに生産する蜂蜜の量は、わずかティスプーンの十分の一にすぎません」(クロワツサン No. 723・めぐり合う、日々の用品 No. 52・津田晴美)

私なんかこういう文章を読むと、「えっ：ウツソー。生涯だよ。スプーン一杯くらい集めるんじゃないの。いやいや、二杯、三杯くらいは」などと、晴美さんには失礼ながら、しかも、何の根拠とてないのですが、なんとなく思ってしまう。強いて言えば勘だけ。情報が嵐のように降り注ぐ時代なので、いち何が本当なのか確認している暇もなく、手段もなく、その嵐の中をアリのようになさまようよりありません。いや、嵐の時アリはどう行動するのか研究してませんので、こういう比喩はちよつと不正確なかもしれませぬ。それはともかくとして、私たちが、その大量の情報の中でいつも困惑していることは確かです。早い話、今度の原発事故についても、

何冊かの本を読んだり、本屋での立ち読みも含めると、私もそれ相応の対応をしているのですが、原子核物理学のゲの字も弁せぬ私は、ただ口をアングリして、学者・評論家・アマチュ

アの甲論乙駁を見ているだけ……という状況に追い込まれそうです。であっても、いささかの私見を述べておきますと、日頃、あんなにも電気のムダ使いを煽ってきた御方々の徹底的な反省と、それをやめる手立てをきちつと作ってください……というのが私の基本です。

少し前、自動販売機全廃論がありました。ジュース・コーヒー・ポカリなんとかという類、全てなくしても水があればよいと私は大賛成なのですが、急にやると失業者も出るので、ゆっくり減らして、気がついたら江戸時代くらいになって……というのが理想なのですが、徐々にというのが人類とても下手なのですね。

ムダの効用・世の中理屈どおりにゆかん。科学の進歩は試行錯誤……みんな分かるのです。が、カミサマから頂いたとしか言いようのないこの大地を汚すのも仕方ないみたいな論理は私には理解不能です。

ところで、世の中、そういう困惑するニュースの多い中であって、自然研究を担っておら

れるかたがたが届けて下さるニュースはおおむね明るく楽しいことばかりです。早い話、この機関誌の前号など。以下少しそのことを記します。

片山さんのニホンカモシカのレポート。ため糞は私タヌキの場合しか見てないのでびつくりでした。他にニホンカモシカの体毛は折れないとか、ニホンジカも天然記念物に指定してゆく時期ではないか……とか。示唆に富んだお話でした。

関さんのヤマネのレポート。いろんな餌を与えて食べるかどうかの研究。袈裟丸山でコダマネズミと呼ぶ由。冬眠中は5℃まで体温が下がるとか。ほとんど死体ですよな。

松村さんの蝶のレポート。ミヤマモンシロチョウは浅間山系にいて、クロマメノキが食餌植物とか。その昔、浅間高原が須藤（志成幸）さんと私のフィールドだったことなどを懐かしく思い出しました。ミヤマシロチョウは湯の丸高原周辺だけのチョウとか。その昔、神津牧場で、スジグロシロチョウかミヤマシロチョウか迷った時、スジグロチョウだと、須藤さんに指摘されたこともありました。

吉田さんのコウシンソウ。私と吉田（誠作）さんとの二人が、須藤さんの案内で登ったのは前袈裟でした。後袈裟にもあるのはうっかりしました。

谷畑さんのニューナイスズメ。私はこの年になってもニューナイスズメを確認できていません。スズメは身近な小鳥なので、私もエッセイを書けば40〜50枚はすぐ書けそうです。ニューナイスズメを見たいというのは宿題の1つですから、注意して読んでました。

以上、全部ではありませんが、みんな一流の観察眼と忍耐力で、私の知らないことを教えて下さるので感激です。私が何より嬉しいのは、これらのレポートが正確な情報だということ。みんな「信念で物を言う」のではなく、「事実から物を言う」からです。今の時代、この「信念で物を言う」のが多すぎやしませんか。へぶんぶと言ひて夜も寐られず……みたい。

また、青木さんの連載も積ればスゲ属の分類に大変有効な手段となりそうです。皆さんから楽しい情報を頂いたので、私も1つお返しをしておきましょう。ヒヨドリがキンモクセイの葉を食べます。冬の堅い葉で

す。何でも食べる鳥ですが、キンモクセイの葉までは考えませんでした。食べ跡の残る葉を私は数枚保存しています。

ところで、この号には、里見（哲夫）さんの、「アベマキの分布に一考」という短文がありました。個人的に里見さんにお手紙するつもりでしたが、他に関心をお持ちの方も考えて、以下、私のところの情報を少し記しておきましょう。

① まず、短文は、『群馬県植物誌』には記載されていないが」とありますが、旧版（1968）にはなく、新版（1987）には桐生市の吾妻山で記載されています。これは、『桐生市植物誌』（1981）に記載があつて、この点は里見さんも指摘されています。内容は発見者が須田隆（キノコの研究者）であること。

30本ほどであること。植栽（たぶん無意識的に）か自生か不明であること。発見は1977年4月1日であること……などです。

② 観音山のアベマキについては、須藤さんから聞いておりました。11年1月、里見さんは神宮（開）さんと調査されて10本ほどを見つけたとのこと。「林業関係者の話だと、時によりクヌギ苗の中に

混じっていることもあるとのことであつた」由。桐生の場合もそんな可能性がよく考えられます。ただ、この点で私がいつも感じることは、クヌギやコナラの苗を植えるという、雑木林を造営する作業についての言い伝えや記録があんまりはつきりしない……ということです。私の無知なのか知れませんが、そのあたりでこと資料や研究があるのなら教わりたい……と思つていゝのです。江戸幕府がこれらの植栽を奨励していたことは知っていますけど。

③ 桐生市の分布について記しますと、分布は吾妻山（481.2m）のみです。（他に「桐生市自然観察の森」に1本。径25cmくらい）がありますが、森造成時に業者がたまたま植えてくれたもの……と考えるのが妥当のようです。森の所長寺内（優美子）さんや私の考えなどを含めての話「吾妻山のは山の北部、桐生市宮本町の最奥部、村松沢沿いの登山口に3本。100mほど登った右手に7本。も少し登って同じく右手に10本です。里見さんの一文から、今回発見者の須田さんと一緒に再調査してみました。（12年4月7日）

入口の3本は、大が径47cm中が36cm（根元が2本に岐れて、太いほう）小33cmでした。

20本のうち、この47cmが最大で、あとは20〜30cmくらいです。観音山の目通り周292cmなどよりかなり小さいようです。なお、入口の3本以外、つまり上の方の17本は20数年くらい前にその雑木林の皆伐に遭つて一度姿を消し、萌芽更新したものです。雑木林は他にコナラが多く、少しクヌギを混ぜており、チョウジザクラ・エゴノキ・アカマツなどがちよつと混じります。村松沢はあとはヒノキを少し混ぜたスギ植林で、ずっと稜線までそれがつづき、ハルニレ・ヤマザクラ・アオキなどが多少見えかくれる程度です。

④ 吾妻山の入口の3本ではない2ヶ所は、厳しい斜面で、70の須田さんと79の私とでは山頂までは無理でした。須田さんが、かなり詰めてくれたのですが、不十分です。したがって合計20本は、確定数ではありません。なお、この斜面の裏側のほうも調査してみたのですが、分布を見ることはありませんでした。

⑤ 道々の話では、須田さんによると、

アベマキの分布は日本の中部を中心に大分地方（彼はそこに数年住んでいたことがあります）などは少なくなるそうです。コルク層が厚いので、シイタケの発生率は悪く、利用価値は低いとのことでした。

⑥ 里見さんの一文では、『新潟県樹木図鑑』に記載ありとのこと。また、『山形県植物誌』には2件の天然記念物ありとのこと。両県とも自生は疑わしいとのこと。更に埼玉県・神奈川県とも記載がないとのこと。これに私を加えますと、『とちぎの植物I』では、記録があるが、「その後の確実な報告がなく除外した」とあります。『長野県植物誌』では「南部・伊那谷・木曾谷の低標高」とあります。

⑦ 須田さんによれば、ワインのコルク栓なども人工的なものに代わって来ていて、需要が減ってきている由。私はスペインからポルトガルへ行く途中の大コルク畑のことなどを思い出していました。

⑧ アベマキといえば、赤城の南西面に拓かれた赤城自然園が今や有名でしょうか。大木が20本くらい植栽されていて、私は実が欲しいときは、ここへ拾いに行きます。

⑨ 以上、いろいろ記しましたが、桐生市のアベマキを見る限り、自生とはとても考えられません。〈苗に混つて〉ということになるのですが、前述のように、苗の歴史がもう少し説明されないといふ感じがいたします。

なお、余談になりますが、ウラジロガシのことについて、ついでに少し記しておきます。

ウラジロガシは、県内での自生はまだ確認できておりません。妙義神社や富岡の貫前神社、安中の桂昌寺などに植栽されたとおぼしいものがあります。〈群馬県植物誌〉では、「丘陵地。まれ」で自生種扱いですが、山中に自然な形で生じているのを見たことがあります。なので、私は自生とまだ考えていないのです。神社に多いことに注目して、私も長年ウラジロガシを追いかけています。積極的に八方手をつくして…というのではありません、半ば自然に、半ば意図的にそうしてきたわけです。桐生市付近の状況をまず説明しましょう。市内広沢町の賀茂神社に1本。これは社殿から15mくらい離れていて、しかも崖の途中なので、発見者の須藤（志成幸）さんなど、自生と考えられた理由のひとつかもしれません。

奇妙なことに、この賀茂神社の近く15mくらい離れた民家の北面に巡らされた防風のためシラカシの中に1本、ウラジロガシがあります。神社の役員ということでご当主に尋ね、先代は何か言っていなかったかななども聞いたのですが、全くもって不明とのことでした。

同じく広沢町の、賀茂神社から200mほどのところに、国の重要文化財である彦部家屋敷があります。この屋敷の奥に八幡宮があつて、そこにし字形に5本、賀茂神社と同じくらいの太さ、（径50cm前後）で並んでいます。

他に太田市数塚町の三島神社に1本（やはり径50cmほど）、太田市丸山町の諏訪神社に2本あります。これは私が気づいたとき（10年ほど前）社殿の裏に並べて植えられている若木でした。径数センチでしたから、植えて間



もないことと見られ、わざわざ植えた理由が分かるのではないかと考えたのですが、とくに神主さんを尋ね当てることもなく、そのままになっていました。今回、(12・4・9)神社にゆくと、通りがかったおぼさんが親切に神主さんの家を教えてくれましたので、なんとか尋ね当てて、会うことができました。

40代くらいの若いかたで、全く知らない。先代は亡くなっている……とのことでした。「長老にでも聞いてきましようか」とのことので、それをお願いして帰りました。2本とも径17cm。

ウラジロガシは、隣の栃木県では珍しくもなさそうです。へとちぎの植物Ⅰによりますと、「県東部の八溝山麓及び県央〜県南にかけ



て、低山地に生育する常緑高木」としており、標本の産地も広範囲です。私自身も、足利市の近くの山中で幼木を見たことがあります。なお、一言加えますと、群馬のウラジロガシは本場とちがつて葉裏の白が薄く、須藤さんが気づいた時、私などはその眼力に感銘するばかりでした。

神社などにウラジロガシがある理由、これが問題なのですが、以上のような状況です。みんな、ことさら努力して植栽していると考えられますので、理由があるはずです。正月のウラジロとの関連、葉裏が白いことの意味など、いろいろ論点があります。ウラジロガシの本場の地方でどうなのか……とか。民俗学の問題でもありそうですが、私は十分論じるほどの資料を持っていません。

群馬の地質

野山の放射能

飯島 静男

渋川の中村庄八さんは線量計を持って、小野子山や子持山の登山道周辺を測って歩いている。渋川市の市街地や里地での線量値は低いけれども、山の高い所は数値が高くなる。

尾根筋では南斜面が高く、北側はぐっと下がる。そう話している。

みなかみの藤原ではアウトドア・リゾート地周辺を、専門の業者が精密測定した。報道されている通り、やや高めではあるが、問題になるほどではないと。大きな岩に当ててみたら、数値が倍以上になった。どうも花崗岩のようだが、と拙宅にサンプルが届いた。

岩石中の自然放射能は含まれているウランやトリウム、それに放射性カリウムなどが発している。花崗岩中にはそれが多い。国内で核燃料資源探査をした時に、群馬では沢入と川場が注目された。川場のは須田貝花崗岩であるが、国内の花崗岩としては含有量が多いと報告された。ただし採掘対象にならない。藤原の花崗岩も同じ種類である。そんな話をして御使者に納得いただいた。

この件について俄勉強した中に「資源物理学入門」(NHK出版)という本がある。その中に、沸騰水型軽水炉はもともと原爆用プルトニウム生産のために開発したもので、この除熱用の冷却水に発電機をとりつけただけ、のくだけがある。軍事用ならば安全は二の次のはずである。洩れた放射能が自然放射能の比でないの言うまでもない。

残された自然の中で (157)

栃尾のツバメ

谷畑 藤男



新潟県のツバメ研究家で、本会の会員でもある木下弘さんから、五月の連休に栃尾町でイベント「雁木あいぼ」(あいぼは栃尾弁で歩こうの意)が行われ、雁木に営巣するツバ

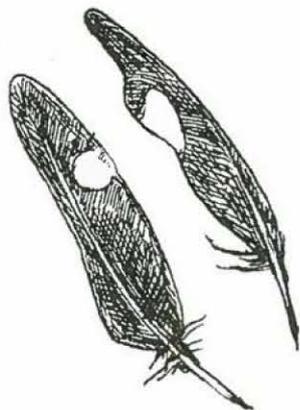
メの資料展示発表もあるという便りをいただいた。

新潟県長岡市栃尾町は越後の猛将「上杉謙信公」旗揚げの地であり、「守門岳」登山口の町である。商人町として栄え、雁木のある街並みが残されている。「雁木」は通りに面した家々が自分の土地を提供し合い、家の庇を延ばして作った冬用の通路、雪国特有の建造物である。

5月4日十時半、新幹線とバスを乗り継いで小雨降る栃尾町に到着。西谷川を渡り「栃尾ツバメと愛護の会」の展示会場である新町区民会館を訪ねる。和室の会場には栃尾町に生息する野鳥の生態写真そしてツバメの子育て紹介や町内のツバメ分布図等が展示されている。分布図にはツバメの巣の位置を示す赤いシールが雁木通りに沿って帯状に並んでいる。区民会館は町めぐりイベントのスタンプラリー会場にもなっており、親子連れの見学者が次々訪れる。来客の対応に忙しいスタッフの中に、木下さんもいて十年振りの再会を果たす。紹介された愛護会のメンバーともツバメや野鳥について旧知のように話が弾む。木下さんの案内で雁木のある商店街を歩く。天井の低い雁木の内側には、家ごとに巢台や

糞を受ける箱が設置され、観光客の頭上を多数のツバメが飛び交っている。

「栃尾ツバメだより」によれば、ツバメが好んで繁殖する環境は、近くに採餌場や人が生きている建物があり、天敵に巣を襲われないことである。街中を流れる刈谷田川と雁木通りがツバメ達の食と住を保障しているという。全国的にツバメが減少していると言われているが、栃尾町の雁木通りには、人とツバメが昔どおりの近い距離で共生している。午後には多田一男さんに車で郊外の棚田を案内していただく。山の傾斜地に小さな水田が重なるように作られ、独特の里山風景を作っている。木下さんやツバメ愛護会の方々にお世話になり、二時半のバスで栃尾町を後にして、明るいうちに高崎に戻る。上空には数羽のツバメが飛んでいたが、雁木通りのツバメを見たいか、ビルに囲まれた駅前の風景が寂しく見えた。



植物をミクロで見る (6)

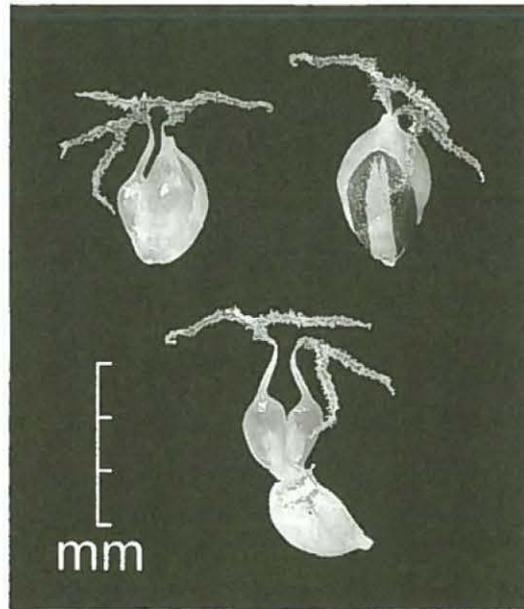
アゼスゲ

青木 雅夫

カヤツリグサ科スゲ属アゼスゲ節のアゼスゲです。観察の季節が早春と限られているのでなかなか、じっくり観察する時間はないでしょう。また、一般的すぎて、あまり気にとめない植物ですが、どのくらいの高さまで分布しているのか気になるところです。山にはヤマアゼスゲが出ます。



以前アゼスゲの雌小穂を観察しているとき、雌しべの柱頭が2本出ているのを見つけた。注意深く果胞を剥いて瘦果を調べてみると子房の2つある双子でした。風に吹かれて波打つアゼスゲの細い葉は、暑い水辺に涼しさを感じさせてくれます。



吾妻川に出没した

イノシシ

関 敏雄

渋川市金井の吾妻川河川敷(吾妻橋上流)に、出没したイノシシを200mの距離から撮影した。撮影日 平成24年3月3日



イノシシの牙

カイツブリの子育て観察

三井田 進

碓氷川と九十九川との合流点の堰堤付近は、水鳥たちの格好の安息地である。自宅近くという事もあって3年程前から野鳥観察のフィールドとして通っている。私にとって重要な観察場所、特に春秋の渡りの時期は夏鳥・冬鳥が入れ交わるので楽しみが倍加する。時より太平洋側からの強い風に左右されるのか、利根川支流沿いに飛来する珍鳥も訪れるので目が離せない。四季折々、多種多様な野鳥たちを観察できる貴重な場所である。今年の4月にはハイイロヒレアシシギを観察できた。

以下は23年7月20日以降の、留鳥カイツブリの観察記録である。今まで何度も彼らと遭遇しているが、この日初めて子連れファミリーを見た。右岸の水面をゆっくり6羽で遊泳している。距離は150m先と遠い。双眼鏡を覗くと、巣立ちしたばかりの幼鳥が4羽、つがいの親の周辺を離れずに泳いでいる。微笑ましく幸せそうな光景である。幼鳥の頭部を

よく観ると、親の精悍な顔付きと異なり産毛の少し残る頭は茶褐色で白斑の荒い縞模様。表情からして人間の赤ん坊に似た雰囲気、とても可愛らしいものだった。

明日からの観察撮影の前に、カイツブリはどんな特徴を持つ鳥なのか図鑑や大型の鳥類生体文献(平凡社)で復習してみた。読後、文献を要約すると、カワウより機敏性に富んだ潜水鳥。文献では潜水して採餌するとある。潜水時間は25秒とあるが、実際は30秒を超えていた。嘴先は鋭く尖り、採餌する餌は小魚やエビ、カニなどの水生生物であるようだ。水底の泥等突き、潜っているエビやカニ類を捕食する。極め付きは足の独特な水かきの構造である。カモ等の水鳥類は足の一本一本が膜で繋がっているが、カイツブリは前3本の指が1本毎に独立していてヘラ状である。足首も柔軟で自由に方向転換出来るとある。また尾は極めて短く潜水時に丁度良い長さなのだろう。足は付け根の位置が尻の先端からいきなり出ているように見え、^{あたま}恰もペンギンのようでもユニークである。

撮影中に確認出来たひとつに鳴き声がある。通常「ピツ」と短く一節で、特に警戒時にはそれを多用する。繁殖時期には「キ

リツ」または「キュルルルル」と語尾長く余韻を残して鳴く。特に繁殖時のつがいはデュエットで鳴き交わす。更にカイツブリの求愛行動の特徴は極めて精巧であり、独特な鳴き声が発達していると記してある。

観察撮影は翌日(7月21日)早朝から開始した。カイツブリのファミリーは、昨日とは反対側の合流点数メートル上流の九十九川左岸寄り、水中から繁茂するヨシの茂みに陣取って休息していた。ここなら私には大変都合な場所。右岸から身の丈の叢から隠れられ、彼らには気付かれないで観察が出来る。ただ親が行動する下流側は逆光気味で撮影には不向きであるが仕方がない。

初日二日、幼鳥は草の茂みに隠れ、身を現すことが少なかったが、数時間に一度は何とか全身を撮ることは出来た。しかし僅かではあるが草被りがフォーカスをずらすのでピン트가甘くなる。撮り直しの連続であった。

親が小魚を捕って茂みに入り、幼鳥に口移しで与えていた時、幼鳥が一羽茂みから川面に出てきた。タイミング良く一羽の親が啜えてきた小魚を与える場面を確り撮ることが出来た。観察を続けると次はザリガニを捕ってきた。小魚より幾分大きく、その上大きなハ

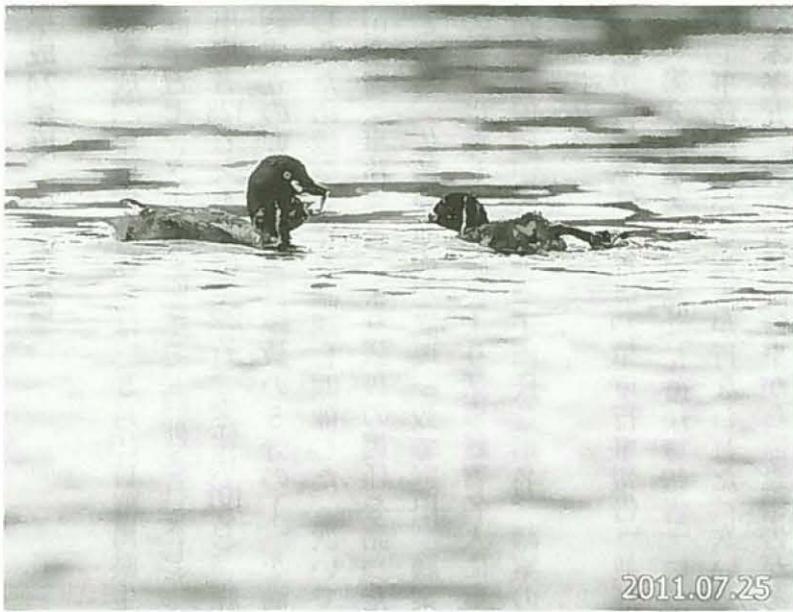
サミがあるので、こんなもの幼鳥が食えるのかと訝しく思ったが難なく飲み込んでしまった。やはり野生は強かだ。人間では出来ない芸当であり全く恐れいつた次第。

四日目、親が13cmほどの大きなフナを銜えてきた。葦の茂みに入ると直ぐに4羽の幼鳥が親をとり囲んだ。親は既に死んでいるフナを水面に浮かべ、子らの様子を見ているうち、一番大きな幼鳥が餌のフナを掬い上げ口を開け飲み込もうとした。が大き過ぎて飲み込めない。半分ほど口の外に魚が出たまま喉を通らない。仕方なく吐き出すと別の幼鳥がそれを口に運ぶ。がやはり飲み込めない。その仕草を見ていた親は、自ら口に入れモゴモゴしては吐き出し、何度かそれを繰り返す。吐き出した餌を水面に浮かべ、子等の様子を待つ。餌が柔らかくなったのか一羽の幼鳥が飲み込みに成功した。この間、25分ほども続いた。興味ある給餌行動が観察できた。

二日目の行動パターンに戻る。ある時、下流左岸20mほど先の合流点、九十九川中央付近に幼鳥一羽がお遊びに出してしまった。一寸危険かなあ…と見ていると、何所からか小魚を啜えた親が口移しに餌を与えた直後、親の合図か、突然幼鳥が水飛沫を上げながら

水面を叩き走り出した。へら状の足が確りと水を捉えている…と同時に今度は親が猛然と大きな水飛沫を上げて我が幼鳥を追い立てたのである。その距離約10m程であったが親は時折こうして子等の成長と、水面での走り具合を確認してようであった。

さて、ついに待望の行動パターンを記すことになる。観察を初めて三日目(7月23日)、の早朝、いつもの場所に撮影のセッティング。



そして事前に文献で知ったカイツブリの精巧な求愛行動シーンを観察することが出来た。この場面は15秒ほどの一瞬で、後にも先にも唯の一回のみだった。早駆け一番7時1分、左下流30m先の右岸寄りから一羽の親が見えた。と同時にもう一羽の親が20mほど離れた横一線に水中から体を水面に出した瞬間…このつがいが双方共にデュエットで鳴き交わし



始めた。「キリッ」、「キュルルルルー」と何度も鳴き交わした。そして私の覗いている先でつがいは同時に左右から相向かい、激しく水飛沫を上げ水面を蹴って走り、鳴き交わしながら互いに中央で寄り添った。つがいは直も鳴き交わし、左岸寄りに仲良く併走して遠ざかって行った。偶然とはいえず大チャンスであった。今朝のフィールドへの早出が功を奏したのである。カイツブリの精巧な求愛行動は文献と同じで実証を得たことは嬉しかった。それにしても普通は「キュルルルー」と一節の発声であるが、この時は連続で同時発声だったのは初めての経験で感動した。

連続5日間（7月21日～25日延30時間）観察と撮影を終えて今思うことは、カイツブリの特異な体形と生態の一端を垣間見て、幸運にもしつかり撮影出来たことである。私にとってこの記録はかけがえのないものである。

ひと月後の8月23日、親並に成長した幼鳥は元氣よく川面を蹴り、水面1mの高さで下流に向けて力強く飛翔して行った。その体形はとてもユニークで両足を後方に真っ直ぐ伸ばし、へら状の足指が少し上に反り返って愛嬌があった。

平成24年度 総会報告

平成24年度定時総会は、5月19日群馬県生涯学習センター第2研修室で開催されました。出席者123名（本人出席22名、委任状101名）。総会成立の要件「正会員総数の5分の1」を満たすため総会成立を確認し開催した。次いで司会者（事務局長）より議長の選任を諮ったところ、佐藤康弘氏を満場一致で選出。議案の審議にあたる。議長より議事録署名名人に事務局吉田龍司、大理幸子両氏を指名。議案の審議に入る。

・第1号議案 「平成23年度行事報告」並びに・第2号議案 「平静23年度決算報告」について事務局長から報告が行なわれた。次いで茂木孝允、反町實男両監事から監査報告があり、「会計は適正かつ正確である」むね監査報告が行なわれた。その結果両案について承認を諮ったところ、反対意見なく満場一致で承認された。

・第3号議案 「任期满了、役員改選の件」について執行部案が提示され、全員留任の予定であったが、今井善之輔氏（理事）、茂木孝允氏（監事）の両氏は健康上の理由で辞任要求があり、理事会ではやむなく受理し、欠員

を含め、新たな理事には小泉正人氏、中澤和則氏。監事には田口秀雄氏が推薦されたので総会に諮った結果、役員改選案は満場一致で承認された。次いで

・第4号議案 「24年度行事案」について事務局長から説明が行なわれた。行事案は概ね昨年同様であるが、新たに環境調査でサンデーフォレスト(株)モニタリング調査と、赤城山鍋割高原環境整備事業(笹刈り)が加わり審議の結果承認された。

・第5号議案 「24年度予算案」について事業収入「7,944,000円」、事務運営・事業費「7,360,000円。時期繰越金「14,586,299円」を計上し承認を諮ったところ、執行部原案通り満場一致で承認された。

議長は議案審議が終了したため退席した。
・その他 「新役員の自己紹介」を行なった。

- ① ゴマシジミ調査「クシケアリとの共生
- ② 榛東村メガソーラーとヤマアカガエル
- ③ 渋川北橋のウシガエル駆除について
- ④ 特定外来生物について
- ⑤ ニホンジカとイノシシの生息増加問題

以上情報の共有で話し合いを持ち、時間が押したため事務局長は閉会を宣言し散会した。

平成23年度会計報告

収入の部

自 平成23年4月1日
至 平成24年3月31日

項目	予算	決算	増減	摘要
前年度繰越金	17,074,713	17,074,713	0	
会費	600,000	515,000	-85,000	
環境調査受託料	4,700,000	0	-4,700,000	ハッ場ダム建設所 受託事業
清掃登山と自然観察受託料	830,000	830,000	0	群馬県自然環境課 受託事業
自然観察教室	555,000	643,000	88,000	
自然観察会	105,000	84,700	-20,300	
特定外来植物の駆除	300,000	0	-300,000	
寄付金	500,000	615,000	115,000	
利息	12,000	4,989	-7,011	
雑収入	0	0	0	
合計	24,676,713	19,767,402	-4,909,311	

支出の部

項目	予算	決算	増減	摘要
事務運営費	4,510,000	4,315,727	-194,273	
自然観察会	230,000	247,681	17,681	
清掃登山	50,000	40,000	-10,000	
サクラソウ等の保護 他	50,000	22,380	-27,620	
環境フェスティバル	20,000	12,412	-7,588	
自然観察教室	550,000	598,424	48,424	
会報「群馬の自然」発行	420,000	455,459	35,459	
自然保護対策委員会	30,000	11,000	-19,000	
自然環境調査	2,500,000	0	-2,500,000	
特定外来植物の駆除	250,000	0	-250,000	
40周年記念講演会	50,000	62,020	12,020	
予備費	250,000	0	-250,000	
次年度繰越金	15,766,713	14,002,299	-1,764,414	
合計	20,166,713	19,767,402	-4,909,311	

平成24年4月25日

上記の通り相違ありません。

監事 茂木 孝允 監事 反町 實男

平成24年度予算案

(24年4月～25年3月)

平成24年5月19日

特定非営利活動法人 (NPO法人)
群馬県自然保護連盟

収入の部

支出の部

項 目	金 額	項 目	金 額
繰越金	14,002,299	事務運営費	3,480,000
		地代家賃費	770,000
事業収入	7,944,000	水道光熱費	130,000
会費収入	600,000	職員費	1,500,000
観察会参加費	60,000	税金	80,000
観察教室参加費	600,000	諸経費	1,000,000
県清掃登山等受託料	830,000		
環境調査受託料	4,700,000	事業費	3,880,000
特定外来植物の駆除	200,000	桜草・ゴマシジミ	20,000
鍋割高原環境整備	450,000	観察会	230,000
サンデン環境調査	400,000	清掃登山	50,000
寄付金	500,000	観察教室	600,000
雑収入	0	環境フェスティバル	20,000
利息	4,000	会報発行	450,000
		自然保護対策委員	30,000
		自然環境調査	1,500,000
		特定外来植物駆除	150,000
		鍋割高原環境整備	250,000
		予備費	580,000
		小計	7,360,000
		次期繰越金	14,586,299
合計	21,946,299		21,946,299

事務局日誌 (165)

- 3月3日 赤城姫を愛する集まり新年会
- 3月4日 県自然史博物館講演会
- 3月6日 県環境保全審議会
会報印刷・編集打合せ
- 3月9日 「春の観察教室」案内郵送
- 3月12日 赤城自然塾運営会議
- 3月14日 会報一次校正、
- 3月15日 会報二次校正、印刷所引渡し
- 3月16日 県ボランティア推進室会議
- 3月22日 赤城山の自然保護活動推進協議会
- 3月24日 3月理事会 10名
- 3月28日 会報「群馬の自然春号」郵送
- 3月29日 3月理事会議事録 郵送
- 3月30日 県自然環境課請求書提出
- 4月4日 サンデンフォレスト事業打合せ
- 4月5日 県幹部来所挨拶
- 4月6日 総会会場使用料払込
- 4月7日 赤城姫を愛する集まり総会
- 4月9日 赤城山環境ガイドボランティア養成講座会議
第29回赤城自然塾運営会議
- 4月15日 春の自然観察教室「坂戸山」25名参加
- 4月18日 国立赤城青少年交流の家運営協議会
- 4月19日 県自然環境課来所行事打合せ
- 4月21日 4月理事会 11名
- 4月25日 23年度会計監査
- 4月26日 4月理事会議事録 郵送
- 4月28日 赤城自然塾9人の提言&活動報告会82名参加
- 4月29日 赤城姫24年度始動式



- 5月1日 県自然環境課委託事業打合せ
- 5月5日 赤城サクラソウ保護地巡視・鹿除ネット巻
- 5月6日 鳴神山清掃登山と自然観察会 24名
- 5月7日 県広報課「群馬一番(GTV)」取材打合せ
- 5月10日 ぐんま山と森の月間推進協議会 総会
- 5月11日 渋川市立南雲小学校 モロコシ山指導
- 5月14日 赤城鍋割山南面ツツジ保全「ササ刈り」開始
- 5月15日 覚満淵「ササ刈り作戦」事前調査&準備会
- 5月16日 「鍋割山南面ツツジ保全委託」行政立会い
- 5月19日 定時総会「県生涯学習センター」
- 5月20日 赤城覚満淵「ササ刈り作戦」86名
- 5月21日 赤城サクラソウ保護地開花株調査
- 5月24日 赤城自然塾 総会
- 5月25日 渋川森林事務所
- 5月26日 叶山鉱業所視察 9名
- 5月27日 荒山高原・荒山清掃登山と観察会 28名
- 5月29日 東電(株)西上武幹線工事関係者来所
- 5月30日 サンデンフォレスト10周年記念式典
- 6月1日 赤城長七郎山自然観察会下見
- 6月3日 相馬山・黒岩清掃登山と観察会 15名
- 6月4日 赤城山環境ガイドボランティア養成講座会議
- 6月9日 前橋市立宮城中赤城林間学校指導 75名
- 6月10日 赤城長七郎山「おとぎの森」観察会 28名
- 6月11日 第30回赤城自然塾運営会議
- 6月13日 前橋法務局 24年度登記申請
- 6月14日 県NPO23年度事業報告書 提出
- 6月15日 傷害保険申請手続き
- 6月16日 赤城山環境ガイドボランティア養成講座Ⅱ
- 6月17日 赤城自然塾9人の提言「尾崎幸男氏講演会」

事務局だより

・5月19日県生涯学習センターに於いて総会を開催しました。議案は事務局原案通り承認されました。詳細は会報をご覧ください。

・24年度愛鳥週間に於いて、理事、佐藤康弘氏が野生生物保護功労者として日本鳥類保護連盟会長褒状が授与されました。おめでとうございます。

・5月20日赤城山覚満淵で「ササ刈り作戦」が行なわれました。当日は86名の方がボランティアで参加され、貴重な草本が蘇りました。次回は11月4日(日)開催予定。皆様のご参加をお願いします。

・絶滅危惧種赤城山のゴマシジミチョウ生息調査を8月18日(予備19日)に行ないます。ご協力参加出来る方は事務局までお電話下さい。

新会員紹介(敬称略)

今井 歩(渋川)

寄付金

高野 幸枝 様	金 10,000円
横山 雄次 様	金 3,000円
山下由紀子 様	金 8,000円
道下 直子 様	金 3,000円

寄贈図書

県自然環境課 ・「群馬県の絶滅のおそれある野生生物植物編2012年改訂版」
赤城姫を愛する集まり様

岸 好孝様 ・「会報第24号」
・「虫の宇宙誌」
・「恐怖の外来生物種たち」
・「ヒトが変えた虫たち」
・「鳥の早起き雀の寝坊」
・「動物生態学への招待」

会費納入のお願い

会計年度は4月1日～翌年3月31日です。会費未納の方には振替用紙を同封しました。お早めにご納付お願い致します。

編集からのお願

新潟県佐渡市で放鳥したトキが4月中旬、繁殖に成功。自然界での雛の誕生は国内では36年ぶりという明るいニュースがありました。トキの野生復帰はよろこばしいことですが、身近な水辺から白サギが激減しているのが気がかりです。

特集「ぐんま百名山の自然X・下仁田町の山①」で妙義山と御堂山の二山を紹介しまし

たが、下仁田町には「ぐんま百名山」はまだ九山あります。(大桁山・稲含山・小沢岳・日暮山・物見山・荒船山・物語山・鹿岳・四つ又山)冬号で特集したいと思います。多数の原稿お待ちしております。

次号の特集は「赤城の自然」を予定しています。保護活動や動植物を紹介できればと思います。原稿の締め切りは9月15日です。自然保護に関するご意見や観察記録もお待ちしております。事務局宛にお送り下さい。よろしくお願いします。



群馬の自然 165号

発行日 平成24年7月
 発行人 NPO群馬県自然保護連盟
 編集人 谷畑藤男
 発行所 群馬県自然保護連盟事務所
 〒370-0046
 高崎市江木町610-10
 電話 027-324-5706
 携帯 090-4833-5789
 替 00320-6-13239
 費 2,000円(年間)